



Title	大島本源氏物語の本文：書入れ・ミセケチ一覧 (一)
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1988, 4, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大島本源氏物語の本文

―書入れ・ミセケチ一覧（一）―

伊井 春樹

大島本と呼ばれる源氏物語が、定家本をかなり忠実に継承した伝本として高く評価され、『源氏物語大成』の底本に用いられて以来、これが唯一の翻刻文でもあることから、青表紙本の標準的な本文として広く利用されてきた。しかし、それには翻字の誤りがあり、その後の注釈書で一部は訂正されているが、同じ誤りを継承している。そのことは、「大島本源氏物語の本文―『源氏物語大成』底本の問題点―」（『詞林』第三号、昭和六十三年五月）に述べた通りである。また、大島本の全冊にわたって行間に書入れられた注記の性格、本文の補入、訂正等の問題についても、すでに明らかにしている（『大島本源氏物語書き入れ注記の性格―「国語と国文学」昭和六十三年八月号）。本稿はその一連の内容で、ここでは大島本の書入れ・ミセケチについてまとめることにする。

以下に示すように、大島本には本文に関する書入れ・ミセケチがかなり多く認められる。朱筆と墨筆によってなされており、本文の書写の折に飛鳥井雅康によってなされもしたはずである

し、明らかに大内氏や吉見氏によって所持された当時の筆もある。本文の余白に注記を転写する作業と平行して、他の本文を参照しながら補訂してもいったのであろう。大半は、単純な書写のミスを訂正するが、中には青表紙本の本文でありながら、ことさら異文を書き込んでいる場合もあるし、その逆の例もある。大成本では、そのような個々の事情を無視して、すべて書入れられたり、ミセケチにされた、後の本文を青表紙本の底本として採用する。そのため大島本が、青表紙本諸本の中で孤立する現象も起こっているのだが、だからといって訂正前の本文を尊重すべきとも判断できず、このあたり処理が困難である。そのようなこともあって、大島本の書入れ・ミセケチを一覧にし、もとの本文の姿を明らかにすることにした。大成本では、校異でかなり詳細に指摘するが、それでも落ちてしまったものも多い。なお、朱筆・墨筆がどのような意味を持つのかまだわからないので、煩雑にもなるので、ここでは省略した。全体的なものと本文の意義は、別に考察することにする。

桐壺

- 1 思ひあかり給ひつ（へ）る（五8）
「ひつ」をミセケチにして「へ」を補入し、「給へる」とする。「へ」を「つ」と読み誤ったのであろう。以下、初めにも述べたように、傍線はミセケチ、（へ）は傍書した語句を示す。
- 2 いとはしたなきことおほかれとかたしけなき事おほかれ御心はへの（五11）
「事おほかれ」をミセケチ。目移りによって、直前の「ことおほかれ」を再度書写したことによると思われる。
- 3 やかてまいらせ（さふせはせ）たまひなと（六10）
「まいらせ」をミセケチにして「さふらはせ」と傍書。
「やかてさふらはせたまひなと」の本文とする。
- 4 いとよはく（う）なれは（八5）
5 事にいて、（も）きこえやらす（八10）
「いて、」の後に「も」とを補入する。以下、たんなる（へ）はその箇所に語句の補入を示す。
- 6 又いらせ給ひては（八14）
「は」をミセケチ。「給ひては」と「は」を持つ本文は、青表紙本のうち肖柏本・三条西家本がある。
- 7 さらにえゆるさせ給はす（八14）
「も」をミセケチ。「も」を持つ本文は、青表紙本の横山本がある。
- 8 いかく思たまへしまかは（と）（九3）
「まとかは」の後に「と」を補入。大島本と一致するのは、青表紙本の肖柏本がある。
- 9 くるしけなれはにたゆけなれは（九5）
「なれは」をミセケチ、「くるしけに」と読ませる。
- 10 かくなから（と）もかくもならむを（九5）
「かくなから」の後に「と」を補入、「ともかくもならむを」とする。
- 11 まかてさせたまふ（つ）（九7）
「たまふ」の後に「つ」を補入する。「まかてさせたまふつ」とする本文には、青表紙本の肖柏本・三条西家本、河内本、別本がある。
- 12 （さは）思ひつかしと（二〇7）
13 くらひ（を）送り給ふよし（二〇8）
「くらひ」の後に「を」を補入する。これについては、『源氏物語大成』の校異に指摘がない。
- 14 勅使きたりて（二〇9）
「たり」をミセケチにし、「勅使きて」と読ませる。
- 15 さまかたち（なと）の（二〇11）
「かたち」の後に「なと」を補入。もとの「さまかたちの」は、別本陽明文庫本と一致する。
- 16 のちのわさなと（に）も（二一1）

「わさなと」の後に「に」を補入。「わさなとにも」とする。もとの「わさなと」の本文は、河内本・別本（陽・国・麦）と一致する。

17 御かたゝの（御）殿る（二一）

「殿る」の頭に「御」を補入。「殿る」は、別本（麦）と一致する。

18 わか宮の御こひしさをのみ（二一）

「を」をミセケチにする。もとの大島本とは、河内本（為）が一致する。

19 暴風にいとゝあれたる心ちして（二二）

他本では「野わき」とある語句だが、大島本では「暴風」と表記する。これで「のわき」と読ませたのであろう。

20 きみもとみに（ゑ）物ものたまはす（二二）

「物も」の頭に「え」を補入。青表紙本の横山本でも、これと同じく「え」を補入する。

21 けに（え）たふましくないたまふ（二二）

「たふましく」の頭に「え」を補入。

22 いとゝ心くるしう御（心）きも、（二二）

23 けにこそいとしのひかた（う）侍けれと（二二）

24 さむへき方（な）くたへかたきは（い）かにすへきわさにかとも（二二）

補入して「は」が二度続くのは、衍字か。

25 夕あさゆふにならひて（二五）

26 やまと鬨言の葉をも（二六）

27 花とりのいろにも音にもよそ（ふ）へきかたそなき（二五）

28 あそひをそし給ふ（ナル）（二五）

「ナル」はカタカナによる補入。

29 いか（て）住らむ浅茅生の宿（二八）

30 は、からせ給ふはすこの御ことに（二八）

31 たうりをもうしなはせ給ふ（ひ）（二八）

32 女御も御心をちる給ぬ（一九）

33 うちゑまれぬへきさまの（し）たまへは（二〇）

34 なす（ら）ひ給へきたにそなかりける（二〇）

35 そのころこまうとのまいれる（なか）に（二〇）

36 こうろくわんにつかはす（し）たり（二〇）

37 弁もいとさ（え）かしこきはかせにて（二〇）

38 けふ明日かへり（さり）なんとするに（二〇）

39 「かへりなん」の本文は、河内本・別本に共通する。

40 ことひろこりてもら（さ）せたまはねと（二二）

41 うたかひををひ給ぬへく物し給へは（二二）

42 けむしになしたてまつりて（る）へく（二二）

43 きさいの宮の姫君みやこそ（二二）

44 いとようおほえてをいり出てさせ給へり（二二）

45 おなしつら（に）思ひきこえん（二二）

- 46 まいらせたまつり給へり(二二14)
 47 人の御きはまさりてそおはえたまへる(二三2)
 48 うけはりてあかぬ事もなし(二三3)
 49 おほしなくさむやうなるにも(二三5)
 50 心(さしを)なしとみえたてまつる(二四1)
 「心」の後に「さしを」を補入。なお、「さしを」の後に
 「イ」と記し、それを削っている。
 51 たちいて、(ものし)と(おほしたり世にたくひなしと)
 みたてまつり(二四2)
 52 後者の補入文の後に「イ」と記し、それを削っている。
 御ひ、きにおとら(さ)せ給はす(二四8)
 「さ」の書入れは朱による。「おとらせ」の本文は、別本
 の御物本と一致する。
 53 きよらをつくしてつかうまつ(れ)り(二四10)
 54 宮す(御やすみ)ところになかて給て(二五2)
 55 こ(の)きみにたてまつらんの御心なりけり(二五7)
 56 人々おほみきなとまいる程に(二五10)
 57 たかすへてまたまはり給ふ(二六4)
 58 女きみはすに(ク)したまへる程に(二六11)
 朱で「こ」をミセケチにし、「ク」の後に「イ」と記すが、
 これは削っている。
 59 この君さへに(か)くをはしそひぬれは(二六13)
 60 心つかひとつにかゝりて(二七8)

- 61 うちすみのみこのましようおほえ給(て)(二七11)
 「給」の後に「て」を補入するが、大成本ではこの補入に
 ついての指摘がない。
 62 おほい殿に二三目なとたえく(に)まかて給へと(二七
 11)
 63 と、のへを(す)くりてさふらはせ給ふ(二七13)
 64 本のしけいしや(を)御さうしにて(二八1)
- 帯木
- 1 内(の)みさふらひよら(う)し給て(三五6)
 2 御むすこ(の)君たち(三五12)
 3 おはされんこそゆる(か)しけれ(三六10)
 4 それかかれかなと(と)ふなかに(三七2)
 5 まことかと(見もてゆくにみをとりせぬやうはなくなん)
 あるへきと(三八2)
 6 われは(は)かほにて(三八13)
 7 左(の)むまのかみ藤式部のせう(三九1)
 「せう」の「せ」に「そ」と傍書。大成本では、「藤式部
 のそう」と、傍書の方を採用する。ミセケチにしているわけ
 ではないので、原本を尊重すべきではないだろうか。
 8 さるへきすぢならぬ(は)世人のおもへることも(三九3)

9 家のうちにたえ(ら)ぬことなと(三九一)
 10 かみかかみは(は)うちをき侍ぬ(四〇五)
 11 わかいもうと(と)ものよろしきゝこえ(四〇三)
 12 君はおほすへ(し)しろき御そと(四一)
 13 ものまめやかにしつる(か)なる心の(四四二)
 14 みすくしたらん中こと(そ)契ふかく(四五二)
 15 その物とあとともさ(た)まらぬは(四七一)
 16 契りふかくともたえて又(見し)かきりと(四九二)
 17 おとなひんにそへて(も)また(五〇二)
 18 「そへて」の本文は、青表紙本の松浦本・池田本・三条西
 本と、さらに別本の陽明文庫本と一致する。
 19 りむしのまつりのてう(うか)くに(五一三)
 20 のとかにおもひながら(ら)はなん(五二五)
 21 うちより旧まかて侍に(五三〇)
 22 おもひしほれ(て)こゝろほそかりければおさなきもの
 23 なども)ありしに(五六二)
 24 わつらはしけにおもひま(つ)はすけしき(五七二)
 25 み木丁へた(て)おほしまして(六三二)
 26 女とをきたつ(ひ)ねはものおそろしき心ち(六四八)
 27 ひまもなけれ(は)(六五九)
 28 しはしきゝ給よけむともえうけ給はらすとかしこまりてさ
 29 ぶらふはしつかたのおましに(六五九)
 30 いづれかいづれなら(と)ひ給に

28 いとおよすけの給ふ(ふ)いにかくて(六七二)
 29 いまは(も)むかしもきたまりたる事(六七二)
 30 うへなるきぬをしやるま(ま)てもとめつる人と(六八二)
 31 おそはるゝ心ちしてやとおもひゆれと(六八四)
 32 かほにもくゆりけり(かゝる)心ちするに(六九二)
 33 きこえ(こえ)んかたなし(六九二)
 34 あせになりていとなやましけなる(り)
 35 あはれし(る)はかり(七〇三)
 36 の給つく(く)すへかめれと(七〇三)
 37 いとかやうなるきは(は)きはとこそ(七〇六)
 38 いとかたくしきはへてはいかてか(七一三)
 39 心つきなしとおもひあなつ(つ)る(七二七)
 40 みなみのかうら(うら)むにしはし(七二二)
 41 人くゝのそくへかめる(り)(七二二)
 42 あそむのおと(う)とやもたる(七三二)
 43 なまめきたるさま(ま)して(七四三)
 44 あはてそころもへにける(ぬる)夜なければと(七四四)
 45 やみなむとおもひはてたる(り)(七五七)
 46 身は(も)いとはつかしくこそなりぬれと(七八一)
 47 その原の(みちにあやなくまとひぬるかなきこえん)かた
 こそなけれ(七八四)

空蟬

- 1 御せうそこ(も) たえてなし(八五八)
 - 2 た(い) めんすへくたはかれと(八五八)
 - 3 はたぢみそよそなとかさふるさま(八八一)
 - 4 をのつからそはめも(にイ) みゆ(八八三)
- 「も」の傍らに「にイ」とするが、大成本の校異では指摘がない。「そはめにみゆ」の本文は、大半の青表紙本がそうであるし、別本の麦生本・阿里莫本・桃園文庫本とも一致する。
- 5 ひさしうみたまふ(は) まほしきに(八八二)
 - 6 はら(は) へもそなたに入りて(八九三)
 - 7 なをえ(た) ふましくなむとうれふ(九三六)

夕顔

- 1 そでのにほひも(所) せきまでかほりみちたるに(一〇四二)
 - 2 おとこはる中にさ(ま) かりてめなんわかく(一〇五二)
- 大成本では「ま」をミセケチにして「ま」を傍書したと校異で指摘するが、明かに他の用例で見ても「さ」である。
- 3 しひらたつものかう(こ) とはかりひきかけて(一〇六二)

- 4 なめならぬかたわ(な) へかりけると(二〇八八)
 - 5 いとものをあま(ま) りなるまで(二〇九一〇)
 - 6 ことさらめきたるさしぬき(の) すそ(二〇一一)
 - 7 さらにえおもひみ(え) 侍らす(二一一七)
- 大成本では、ミセケチにした「おもひえ侍らす」の本文を採用するものの、そのことには触れていない。
- 8 かくれさ(ま) かりありく(二二二八)
 - 9 たゆま(ま) すあされありけは(二二四一〇)
 - 10 さてすくしてんとおほされすと(二二五一)
 - 11 ふとそむきかへ(く) るへきころ(二二五二)
 - 12 にはにされたるくれ(竹) せむさいの(二二七三)
 - 13 いかて(か) にわかならんと(二二七二)
 - 14 人くましきかくれかもとめたるなる(り) (二二〇三)
 - 15 みどころなくみな秋の、(ら) にて(二二〇八)
- 底本はもと「秋の野にて」の本文、これは青表紙本の横山本・榊原本・池田本と一致する。
- 16 けうそ(と) くもなりにける所かな(二二〇一一)
 - 17 つと御かたはらに(に) そひて(二二一四)
 - 18 人は(え) き、つけてまいらぬに(二二三二)
 - 19 あつかりかさ(う) しのかたにいぬなり(二二四一)
 - 20 女おもかけにみえてふとにえうせぬ(二二四四)
 - 21 から(う) して鳥のこゑはるかにきこゆるに(二二六三)
 - 22 あま(さ) りものせよといひつるはと(二二七二)

23 あ(む)まにてもものせむとの給ふを(一二三二)
 24 いさ二条(院)へとのたまへと(一二三四)
 25 か(わ)のみつにてをあらひて(一二三五)
 26 われもよにえあるまじきなめ(り)(一二三六)
 27 なかく(いみ)しくなまめかしくて(一二三七)
 28 またうちかつ(へ)しつらうおほゆる(一二三八)
 29 たま(また)ことの葉にかゝるいのちよ(一二三九)
 30 しのひてとの給つ(へ)れと(一二四〇)
 31 少将のなきかは(かほ)におりにみすれば(一二四一)
 32 を(も)むくらむんとおもほしやりつ、(一二四二)
 33 右近は(は)たかしかましくいひさはかんを(一二四三)
 34 ゆくゑなくてすき(ゆく)君は(一二四四)
 35 あま(ま)りものいひさかなき(一二四五)

若紫

1 わらはやみにわ(つ)らひ給て(一二五一)
 2 しゝこらう(か)しつる時は(一二五二)
 3 とくこそ心みさせたまはめときこゆ(こゆ)れは(一二五三)
 4 御らんせさせ(て)侍らは(一二五四)
 5 よろつにまき(ら)はしきこゆ(一二五五)
 6 こと所にすゆほひる(か)なる所に(一二五六)

7 申給はれりける(か)さなれと(一二五七)
 8 そこえ(ら)はるかにいかめしうしめて(一二五八)
 9 そこのみるめもものむつかしうなと(一二五九)
 10 た、ならす(す)おほしたり(一二六〇)
 11 たいとこ御もの(の)けなとくははれるさまに(一二六一)
 12 いたうかす(み)たるにまきれて(一二六二)
 13 十はかりやあらむ(と)みえて(一二六三)
 14 たちてゆくかみの(ゆ)る、かに(一二六四)
 15 わらはやみにわ(つ)らひ侍るを(一二六五)
 16 かゝり火ともしとに(う)ろなともまいりたり(一二六六)
 17 うち(つ)ける御夢かたりにそ侍るなる(一二六七)
 18 さかし(ら)心なくうちかたらひて(一二六八)
 19 はしたなし(く)やなとのたまへは(一二六九)
 20 たきのよとみもまさりておとたかうきこゆ(一二七〇)
 21 「も」をミセケチにするが、大成本では指摘なし。
 22 すこしねふたけなる(と)経の(一二七一)
 23 もとの底本と同じく「経の」とする本文は、青表紙本の池田本・三条西本と一致する。
 24 する(す)ろなる人も所からものはれなり(一二七二)
 25 おほえ(なき)心ちすへかめれと(一二七三)
 26 あやしい(ひ)かみ、にやとたとるを(一二七四)
 27 うけ給はりわく(く)へき人も(一二七五)
 28 さるやうありてきこゆるな(ら)んと(一二七六)

- 27 いかてきい給へるこそ(と)そと(一六三14)
 28 思たまへぬへき(御)事な(からもきこめしひかめたる
 事な)とや侍らんと(一六五3)
 29 と経しつ(る)ほうしのふせとも(一六七8)
 30 あさましくをくら(さ)せ給へること、(一六八5)
 31 なに事に(も)めうつるましかりける(一六八11)
 32 すいしむさうのふえ(え)もたせたる(一六八12)
 33 けに、(く)からすかきならして(一六九1)
 34 めてたき人かなとみた(ま)ひて(一六九7)
 35 宮の御ありさまよりもまさり給へるかなら(な)と(一六
 九7)
 36 ひ ひしりのたうと(と)かりける事なと(一六九11)
 37 山みちのものかたりをもきこえむは(い)ふかひありて
 (一七〇10)
 38 世には心もとけ(け)す(一七〇11)
 39 うとくはつかしきものにおほし(て) (一七〇11)
 40 しりめかり(に)みをこせ給へるまみ(一七二1)
 41 まれまれはあさましの(御)事や(一七二2)
 42 とさまかうさまに心みきこゆるるを(ほ)と(一七二4)
 底本のもとの本文「きこゆるを」とは、青表紙本の横山本
 と一致する。
 43 と(か)う世をおほしみたることおほかり(一七二7)
 44 身をもはな(れ)す山桜(一七二3)

- 45 いと、うしろめたかう(と)あり(一七二9)
 46 いづくにも、(く)まうて給はず(一七三11)
 47 いかなるにかと御(心)うこせ給へかめる(一七四12)
 48 御つかひなどの(ひ)まなきも(一七五11)
 49 き、給ひて(もしさるやうもやとおほしあはせたまふ)に
 いと、しく(一七五11)
 50 さらにたい(は)かるへきかたなし(一七六5)
 51 しら(く)れめいてうちそ、く(一七七2)
 52 みなみのひさしひくつくろひて(一七七11)
 53 うけたまは、(ら)さりける(一七八1)
 54 いみしう心へそき(け)にみたまへをくなん(一七八1)
 55 なにかあさう思ひ給へとも(む)事ゆへ(一七八9)
 56 かなしひ思ひ給ふ(る)なと(一八〇7)
 57 こみや(す)所にをくれたてまつり(一八〇8)
 58 いたつらに宮のおはするかとて(一八二4)
 59 よりおはしたる御こゑいとらら(う)たし(一八二5)
 60 おほしはなつへうもあらす(一八二5)
 61 いとうつくしうおもひやらる(る)(一八二11)
 大島本のもとの本文「おもひやらる」と、青表紙本の御物
 本・横山本・榊原本・池田本・三条西本、河内本の高松宮本
 ・尾州本・鳳来寺本とが一致する。
 62 うしろめたなうわりなしとおもひ(へ)と(一八三7)
 63 この御四十九日すくしてや(なと)思ふ給ふる(一八四6)

- 64 さうくしの(うおも)ひおもはず(一八六4)
 65 よる(ひる)こひきこえたまふに(一八六4)
 66 いはけなくうちいてき(こ)えさせ給ふな(な)と(一八七4)
 67 あやしう(おほしの給はするもいかなる御ころにか)おもひける(一八七8)
 68 思はむなど(いひてこの人も事ありかほにや思はむなど)あいなければ(一八七11)
 69 えまいりこぬ(ヲ)をろかにやなとあり(一八八5)
 もとの本文の「えまいりこぬ」は、青表紙本の横山本と一致する。
 70 さふらふ人くもおもひ(み)たれて(一八八5)
 71 あつまをすか(か)きて(一八八8)
 72 ぬすみいてたりともときおもひなむ(一八八12)
 73 車のそうそく(さ)なからすいしんひとりふたり(一八八12)
 74 なに事も(に)か待らむ(一八九11)
 75 さ(る)へきにおはしまさはともかうも(一九〇9)
 76 侍る(り)なむをいと思ひやりなきほと(一九〇9)
 77 そは心な(な)り(一九一2)
 78 さすかにゆゝしそ(け)れはねむしるたり(一九一6)
 79 いかにする事な(ら)むとふるはれ給へと(一九一10)
 80 お(ほ)ろけにはあらしとさゝめく(一九二4)

- 81 ことさらにまいれて(と)ありければ(一九二7)
 82 いとうつくしきかり(に)われもうちゑまれて(一九二13)
 83 (いと)わけれとおいさきみえて(一九三14)
 84 こあまきみのにそわ(に)たりける(一九四1)
 85 たかひぬるはお(く)ちをしうおほしけり(一九四13)
 86 さかしう(ら)心あり(一九五7)

末摘花

- 1 (うちに)さふらふわかむとほりの(二〇二1)
 2 いかてか(は)御らむしつけむときこゆれば(二〇四14)
 青表紙本の横山本・三条西本ともに「は」を補入する。
 3 ひきわかれ給ひけるを(二〇五8)
 4 おほつかなく心なましき(に)(二〇七11)
 5 人わきし(し)けると思ふに(二〇八4)
 6 えにしもやとつきなけにこそ(二〇八14)
 7 大成本の校異では「えにもやと大」と「し」を落とす。
 8 わりなきにて(を)えさしして給はぬとなむ(二〇九10)
 大島本では「を」を補入するが、大成本には指摘がない。
 9 かの御ゆるしなう(く)ともたはかれかし(二一〇1)
 さうくしきよひるなどにはかなきついでに(二一〇4)
 もとの本文「よひるなとに」は、青表紙本の横山本・池田

本・肖柏本・三条西家本と一致する。

- 10 いまめきたるけをつけはや(と)そ(二二一七)
11 おとこはいとつきせぬ御さまを(二二二二)
12 君かし、は(ま)にまけぬらん(二二三九)
13 なかくくれ(ち)ふたかるわさかな(二二三四)
14 きふせりけれとしりかはならしと(て)(二二四二)
15 かるらかならぬ人の御ほと(を)(二二五一)
16 「御ほと」は、別本の陽明文庫本と一致する。
17 さらはもろと(も)にとて(二二五六)
18 ぬすまはれ給へ(れ)(二二七三)
19 かのわたりにはいとをほつかなく(て)(二二七四)
20 さすかにうちみや(ら)れ給ふ(二二八一)
21 さむしと思へるけしきふかう(て)(二三三三)
22 ふるきのかはならぬ(きぬ)あやわたなと(二三三三)
23 心はせ(の)なたらかに(二三四六)
24 はしたなうはえ(え)かへし侍らす(二三五五)
25 いと(うれしき心さしにこそはと)の給ひて(二三五八)
26 (なを)あるやうあらむとおもひあはする(二三六四)
27 御ひとりあみは(と)とかめあへり(二三七一)
28 さこむの命婦やひこのうねゑ(へ)やましらひつらむ(二二七三)
29 人のたてまつれる御そひとく(たり)(二二七八)
30 もとの「ひとく」は「一具」、この本文と青表紙本の横山

本・池田本・肖柏本・三条西家本、それに河内本、別本の陽明文庫本とが一致する。

- 29 けはひうちそよめき(よ)ついたり君も(二三八四)
30 御ひんくきのしとけなきをつくろひ給ふ(二三八二)
31 さへつるはるとかし(らい)うしてわな、かしいてたり
(二二九四)
32 はくろめもさ(ま)たしかりけるを(二三九一)
33 心からなと(か)かううき世を(二三九二)
34 いかの給はむ(と)すらむと(二三〇七)

紅葉賀

- 1 見給ひ(ひ)しのはれすやありけむ(二三八八)
2 まことの(み)山をろしときこえて(二三九八)
3 人むかへ給へ(ふ)なりと人のきこえければ(二四〇九)
4 その事のかかぬに(と)おほゆるきすもなし(二四一三)
5 おさなき人はみついたまふ(まゝに)(二四一三)
6 いたく(く)しなとしたまへは(二四一四)
7 さるへ(き)事などはおほす(せ)事も侍らむこそ(二四一四)
8 けふは(こと)いみしてなゝひたまひそ(二四四四)
9 やむ事(なくおほし)したためたる事にこそはと(ろ)のみ

をかれて(二四五4)

10 (くはしく) そうし侍らむと(二四七8)

青表紙本の横山本・榊原本・陽明本・池田本・肖柏本・三条西家本、別本の御物本は、いずれも「くはしく」を持たない。大島本の補入は河内本との校合によるか。

11 さか(り)ぬへきひまにやありけむ(二五〇8)

12 いくるしうこそさ(あ)れと(二五二6)

青表紙本の横山本・榊原本・陽明本・池田本・肖柏本・三条西家本、別本の御物本が、もとの底本の「されと」と一致する。河内本は「こそはあれされときみはまた」とある。

13 人の心やふらしと思てむつはしければ(二五二7)

「むつはしければ」は、大成本の校異に用いた青表紙本はすべて「むつかしければ」とある。ただ、大島本には「は」の傍らに「カイ」とし、「むつかしければ」の異文も存在する旨を述べるが、大成本では指摘がない。

13 なさけなからぬほとにうち(い)らへて(二五四3)

14 わかもたせまへるにさしかへて(二五五3)

15 こたかきもりのかたえ(を)ぬりかへ(く)したり(二五五4)

「ぬりかへしたり」は、青表紙本の横山本・榊原本・陽明本、河内本の七家本・尾州本・平瀬本、別本の御物本と一致する。

16 わつらはしいてなむよ(く)ものふるまいは(二五八4)

「く」は補入だが、大成本では指摘がない。

17 うちとけてものいひ(朱傍書「思ひい」)さはけるけはひ(二五八14)

「いひ」の傍らに「思ひい」と朱書するが、大成本には指摘がない。「もの思ひさはける」の本文は、校異に用いた他の青表紙本、河内本、別本の御物本と一致する。

18 まことはうつくし心かとよ(二五九5)

19 かたみにおほ(ほ)えまる(二六一1)

20 (さ)てそのうちともすれは(二六一4)

21 され(と)うるさくてなむ(二六一2)

22 まいり給夜の御とん(も)に(二六一9)

花宴

1 いとめやすくもうく(て)しつめて(二六九7)

2 かゝるかたにやむに(こ)となき人おほく(二六九9)

3 さらにいはいはすと(と)のへさせ給へり(二六九13)

4 この君をひかりにしたまつ(へ)れは(二七〇8)

5 いかてをろかにおほされれん(二七〇9)

6 にくみ給らむもあやしうしう(二七〇10)

7 ふちつほわたりをは(わ)りなふしのひて(二七一3)

8 ほそとのにたちより給つ(へ)れは(二七一4)

9 やを(を)らのほりてのそき給(二七17)
 10 こなたさまに(は)くるものか(二七19)
 11 やかてきこえ(な)はたつねても(二七12)
 12 くまなきよ(しきよ)これみつをつけて(二七12)
 13 かくれたちて侍へ(つ)る車とも(二七14)
 14 めなれ(たる事なれ)とゆへなつかしう(二七48)
 15 れいのいとくちおしくう(う)おほせと(二七53)
 16 ものゝねとも(と)のほりて(二七58)
 17 れいともなりぬへく見たまつ(へ)しに(二七513)
 18 ましてさめ(か)ゆくはるにたちいて(二七65)
 「め」をミセケチにして「か」とするが、大成本には指摘がない。

19 か(か)つらはむも人わるく(二七65)
 20 うちにうく(て)御たいめんのついでに(二七610)
 21 うへにうに(そう)し給ふしたり(二七614)
 22 女みこたちなともおいひ(い)つる所(二七71)
 23 まよは(ま)しやはといふこゑ(二七812)

葵

1 きさきはし(ら)の女三の宮(二八55)
 2 たちわつらふ(よき)女房車おほくて(二八68)

3 いつかた(に)もわかき物とも(二八613)
 4 さはかりて(にて)はきないはせそ(二八72)
 5 心はせの(いと)はつかしく(二八913)
 6 思ひくたすへかめに(る)もやすからず(二九11)
 7 あるしましきことなともさまたけきこえ(二九13)
 8 きこゆ(え)かゝつらひ給へは(二九32)
 9 かやうに(待)きこえつゝあらむも(二九五6)
 10 いとなたら(た)しうひたすら世に(二九71)
 11 さすかに(いみしう)てうせられ(二九714)
 12 おとゝも宮もすこしし(り)そきあへり(二九83)
 大成本の校異に用いた青表紙本はすべて「しそき」とある。
 河内本も「しそき」なので、「り」の補入はそれ以外の系統本によるか。

13 いひいへ(つ)ることもきゝにくゝ(二九98)
 14 御そきかへなとし給て心え(み)たまへと(三〇〇12)
 15 いまかう(ら)いとさまことに(三〇17)
 大成本には、このミセケチの指摘なし。
 16 いかてかはさ(さ)のみは(三〇110)
 17 あやしきまでうちまも(ら)れ給(三〇112)
 18 あさ(ま)りわかくもてなし給へは(三〇31)
 19 うれしきを(せ)もましりて(三〇44)
 20 のこる事なくかつそこな(は)れ給事(三〇46)
 21 は(か)なうすきゆけは(三〇62)

賢木

- 1 まことにうして(と)おほす事こそ(三三三4)
- 2 御すみかに(はた)あらねは(三三三13)
- 3 女かたも(いと)心あはたしけれと(三三四3)
- 底本では「いと」を補入するが、大成本での指摘はない。
- 河内本の高松宮家本・尾州家本が「いと心あはたしきに」であり、別本の為相本・国冬本も「いと」を持つ。
- 4 みすいら(し)むことくしきすかた(三三四8)
- 5 ほにはさまかはりて見ゆ(傍記「おもほゆ」)(三三五1)
- 「見ゆ」の傍らに「おもほゆ」と記すが、大成本では指摘がない。なお、別本の為相本・国冬本が「おほゆ」の異文を持つ。
- 6 ひたきやかす(か)にひかりて(三三五1)
- 7 あきらめ侍し哉(かな)と(三三五8)
- 大成本では、校異で「哉」をミセケチにして「かな」とすと指摘するが、傍書されているにすぎない。
- 8 わか／＼しう(いて)ゐんかいまさらに(三三六8)
- 9 にはのたたすは(ま)ひもけにえんなるかたに(三三七3)
- 10 おもほしのう(こ)すことなき(三三七4)
- 11 あやまちもしつへく(く)めてきこゆ(三三七14)
- 12 か(か)ならす心かゝる(三三九11)

- 22 きこえぬほとはおほしし(る)らむや(三〇七4)
- 23 ねんころにきこえつけさま(せ)給しかは(三〇八8)
- 24 見たてまつりあへる(つか)はむなと(三〇八8)
- 25 くんしるあ(たか)りけり(三一〇14)
- 26 さるへ(き)かきりの人／＼(三二10)
- 27 あくかれ(は)てきせ給はむほと(三二三3)
- 28 あきとおる(り)たるなとに(三一五11)
- 29 一日ふつかも見(え)給はす(三一七8)
- 20 我(わか)君をみたてまつりて(三二七13)
- 31 わかれおしむほと(を)のかし、(三二八1)
- 32 さならぬおりたにある御けしき(三二八9)
- 33 うち(そ)はみては(わ)らひ給へは(三二九5)
- 34 たし(た)かの心つくしきこゆる人に(三二九6)
- 35 あしたにはわか君の御(も)ともに(三二九14)
- 36 ひるつかたに(わ)たり給て(三三一4)
- 37 おもひのほかに心(う)くこそおはしけれ(三三二7)
- 38 御さら(ら)ともなといつのまに(三三三6)
- 39 いかにおもひつらむとさら(さ)めきあへり(三三三10)
- 大成本には、「ら」をミセケチにし「さ」を傍書する指摘なし。
- 40 かはかりみしか(か)らめ(三三四7)
- 41 さうくしけれ(く)はへなけれ(三三六1)

13 せきのあなたよりそ御かへり(返し)ある(三四〇四)
 14 ひとたひにも(と)おほしめしけれと(三四一五)
 別本の国冬本が「ひとたひにも」の本文を持つ。
 15 (なに)心もなくうれしとおほし(三四二七)
 16 (藤の御そにやつれ給へる)につけても(三四三八)
 17 おほした(た)るゝ事はあれと(三四三八)
 18 かゝるへきこと(と)はおほししかと(三四六二)
 19 かものいつきにはそ(む)わうのゐたまふ(三四七五)
 20 (夜)ふかきあかつき月夜の(三四九一)
 21 (猶このにくき御心のやまぬに)ともすれば(三四九九)
 22 春宮の御ため(に)かならず(三四九二)
 23 「御ため」は、河内本と別本の御物本・国冬本と一致する。
 24 ぬりこめにをしいれら(れ)ておほす(三五〇七)
 25 いとおしう(など)うちさゝめき(三五一一)
 26 おほえ給つ(へ)るかなとみ給まゝに(三五一一)
 27 はつ(かしけなる)さまなとも(三五一一)
 28 ある(り)ときこしめされむも(三五三一)
 29 むくつけきまでおほしいれる(り)(三五三三)
 30 うちたへ(え)て内春宮にもまいり給はず(三五三三)
 31 こもる(り)おほして(三五三三)
 32 この女君のいとらうたけ(に)て(三五三三)
 33 かみはそれよりもみしかくも(て)(三五五八)
 33 つね(に)かきかはし給へは(三五七九)

34 人は(わ)るきまでおほえ給へは(三五九四)
 35 内の御方にまいり給つ(へ)れは(三六〇三)
 36 いますこしなる(ま)めかしきけそひて(三六〇四)
 37 とかめさせ(給)はさりける(三六一四)
 38 とか(は)せ給て(三六一五)
 39 思給へられ侍りてとそに(う)し給(三六一二)
 40 身つ(か)らのおもておこしになむ(三六一一)
 41 白虹(虹)日をつらぬけり(三六一六)
 42 ころもへにけり(と)きこえ給へり(三六三三)
 43 あなかにしひのかき給つ(へ)らむ(三六三三)
 44 大成本の校異に用いた青表紙本諸本、それに河内本・別本
 (為相本・国冬本)はいずれも「かき給つらむ」とする。
 45 なへてならぬをえりいてつ(つ)(三六三三)
 46 十二月十よひ(日)はかり(三六四四)
 47 たまのちくらのへこし(うし)ちすのかさり(三六五一)
 48 御よういなとなをにる(もの)なし(三六五九)
 49 御くし(おろし)給程に(三六五九)
 50 (など)かきしもと(三六六六)
 51 いとたへかたうお(ほ)さるれと(と)(三六六六)
 52 にしのたいのみなみのあたりに(三六八二)
 53 かむ(たち)めなど道をよきつ(三六八九)
 54 かくも(む)をもあそひをも(三七二二)
 54 いかてかに(う)しもたらひ給ひけん(三七三二)

- 55 かうやうなるおりのまは(な)らぬ事(三七四六)
56 しぬへく(く)おほさる(三七七三)
57 いはせ給らぬをたに(三七七二)

花散里

- 1 うちわたりにては(は)(かなう)(三八七六)
2 よくなることをあつまに(をイ)しらへて(三八七二)
大成本の花散里の底本は定家筆本によっており、大島本は
校異として採用するため、この「あつまを」とする傍書は指
摘がない。河内本はかなり本文を異にするが、「あつまを」
とある。

- 3 かつらの木(の)をひかせに(三八七四)
4 いかなるに(に)つけても(三八八二)
5 女(御)の御けはひねひにたれと(三八九四)
6 よにしたかふものなれは(はかなきイ)むかしかりも
(三八九三)

「ものなれは」の後に補入の符号を付して「はかなきイ」

と傍書するが、大成本には指摘がない。河内本は「はかなき」
の一句を持つので、その本文によって校合したのであろう。
付記―本稿は、昭和六十三年度文部省科学研究費一般Cによる
成果の一部である。なお、調査にあたっては古代学協会の御厚
意に感謝申し上げる。